

## 論文の内容の要旨

### アラビア語著作から見る西アフリカ・イスラームの宗教的・知的連関網 アフマド・バンバに至る水脈を中心に

荻谷康太

本論は、西アフリカのアラビア語写本・刊本の分析を礎に、直接的関係（師弟関係・面会・書簡の遣り取りなどによって構築される、何らかの情報伝達を伴った同時代の宗教知識人間の繋がりに）、および間接的関係（特定の著作の学習・注釈書の執筆・韻文化・引用などといった知的営為を介した著者と読者との繋がりに）によって構成される同地域の宗教的・知的連関網を描写した。またこの描写に伴って、従来の研究で注目されてきた同地域のスーフィー教団的枠組みの相対化も目的とし、その作業の過程で 18 世紀以降の西アフリカ・イスラームに関する基礎的な情報の整理・蓄積を行った。

本論執筆の背景となった問題意識は、まず、教団的枠組みに基づく従来の西アフリカ・イスラーム研究では見えにくかった、この枠組みを越えた宗教知識人同士の繋がりを明らかにし、同地域のより正確な宗教的・知的体系の実像に迫ること、次に、西アフリカの宗教知識人達がマッシュリクやマグリブといった他地域との連関の中で自らの宗教的・知的体系を構築していた事実を明らかにし、「黒いイスラーム」論に見られるような、この地域のイスラームの特殊性を過度に強調する視点を是正すること、そして、西アフリカという地域を対象とした日本における諸研究が、現地人の書いた大量のアラビア語著作群を 1 次資料とする実証的視点に立ってこなかった状況を是正すること、という 3 点である。

広大な時間的・空間的領野を扱う本論では、セネガルのムリッド教団（ムリーディー教団）の祖アフマド・バンバ（Ahmad Bamba, 1927 年歿）を議論の軸とすることで、論全体を秩序づけ、描写対象とする宗教的・知的連関網に一定の枠を設けた。また、第 1 部で西アフリカの諸教団の代表的な宗教知識人を議論の中心に据えて教団的枠組みの存在を明らかにしておき、第 2 部でそうした枠組みを越えて構築されていた宗教的・知的連関網を整理・提示するという構成によって、

本論の目的の一つであるこの枠組みの相対化を行った。ただし、第2部での議論を見越して、第1部においても、各宗教知識人の宗教的・知的連関網に関する情報を優先的に紹介した。そして、教团的枠組みの相対化という目的、および議論の軸であるバンバの歿年から、対象とする時間的射程の中心は、18世紀前半から20世紀前半のおよそ200年間とした。

まず第1部第1章では、西アフリカにおけるカーディリー教団の中興の祖ともいえるスィーディー・アル=ムフタル・アル=クンティー (Sīdī al-Mukhtār al-Kuntī, 1811年歿) と彼に率いられたクンタを議論の中心に据えた。第1節では、スィーディー・アル=ムフタルの血統の提示から、15世紀のスィーディー・ムハンマド・アル=クンティーの存在、およびクンタの血統におけるベルベル性を考察し、更にアラブのウクバ・ブン・ナーフィアをクンタの始祖に位置づける主張とアラブ勢力南進以後のサハラ西部におけるクンタの活動との関係性、スィーディー・アフマド・アル=バッカーイの登場とクンタの血統の分化に関する逸話を論じた。第2節では、まずスィーディー・アル=ムフタルの誕生・修学・修行の様子を描写した後、彼のタサウフの道統を提示し、この道統が孕む幾つかの問題点に関して、彼の伝記の記述内容の検討や、他の宗教知識人の道統との比較などに基づいて考察を行い、これらの問題点が恐らく伝記の著者の意図的な改変によるものではなかったであろうことを指摘した。第3節では、スィーディー・アル=ムフタルが学んだ著作一覧を提示し、彼が複数の師の許で多様な学問を修めていたことや、師弟関係における知識伝達が双方向的であったことに触れた後、西アフリカにおけるマーリク学派の影響力や、スィーディー・アル=ムフタルによる学問の分類、この地域における紙媒体としての著作の重要性、口承の価値の相対性、書物を介した宗教知識人同士の間接的関係の把握の必要性を検討した。第4節では、スィーディー・アル=ムフタルや息子のスィーディー・ムハンマドの著作群に影響を受けたであろう宗教知識人を具体的に列挙し、彼らの中に築かれた宗教的・知的連関網が教团的枠組みの内外に張り巡らされていたということを明らかにした。

次に第1部第2章では、西アフリカにティジャーニー教団の道統をもたらしたムハンマド・アル=ハーフィズ (Muḥammad al-Ḥāfiẓ, 1830/1/2?年歿) を中心に議論を展開した。第1節では、ハーフィズの帰属するイダウ・アリという部族の起源からモーリタニア南部への定着までの歴史を纏めた。第2節では、ハーフィズの若年期の特異な修学状況を描写し、複数の師との関係を論じると同時に、ハーフィズが学んだ著作一覧の提示から、第1章での議論を受けて、西アフリカで学ばれた著作の中に普遍性の高いものが存在していたことや、マーリク学派の影響力に再考の余地があることなどを指摘した。更に、ハーフィズの聖地巡礼とティジャーニー教団加入の過程や、彼が教団の祖から受けたイジャーザ、西アフリカにおける布教開始の契機などを検討した。第3節は、自教団と他教団との並存を容認するハーフィズの思想から議論を開始した。そして彼の道統に繋がるスーダン西部の有力な宗教知識人を具体的に列挙し、その道統に関する考察を行った後、ハーフィズおよび彼の道統に属するティジャーニー信徒が、教团的枠組みを越えた直接的・間接的関係の中に存在していたという事実を明らかにした。

そして第1部第3章では、モーリタニア南東部のハウドを活動の拠点として独自の教団論を構築したムハンマド・アル=ファーディル (Muḥammad al-Fāḍil, 1869年歿) を中心に議論を進めた。

第1節では、ファーディルの血統の提示から、ファーディルの帰属する部族に関する情報および疑問点に言及し、更にファーディル自身と彼の一族に帰される宗教的卓越性の逸話を紹介した。第2節では、ファーディルのタサウフの道統に触れた後、彼の若年期の修学過程を追っていき、その中で、彼が故郷を離れることなく特別な宗教的地位に至ったという主張を支える「知識の鍵」や「獲得の知」といった概念、そして神からの直接的な知識の開示に関する言説を詳らかにした。第3節では、ファーディルの奨励する宗教儀礼との関係から、ムハンマド・アル=アグザフと彼を名祖とするグズフィー教団に関する概説を行った後、クンタとグズフィー教団との関係、およびクンタとファーディルとの関係を複数の著作の分析によって考察し、クンタとの関係においてファーディルらが展開した現実的な戦略の様相を明らかにした。更にそこから議論を展開し、ファーディルらの主張を支える根本的な「論理」が、歴史上の全てのシャイフに優越するファーディルの特別な宗教的地位に基づいていることを明らかにした。第4節では、諸教団が本質的に単一であるという、ファーディルの唱えた「教団単一論」の内容を、1次資料の分析や、前章で言及したハーフィズの見解との比較から詳らかにすることで、ファーディルの道統を安易にカーディリー教団の分派に分類すべきではないこと、そしてこの「教団単一論」が前節で明らかにした特別な宗教的地位の「論理」を背景にしていることを明らかにし、最後に彼の思想が故郷を離れた子孫や弟子によってマグリブやスーダール西部にも広まっていった点を指摘した。

次に第2部第1章であるが、この章は、本論全体の軸となるバンバの若年期の考察にあてた。第1節は、バンバの先祖に関する情報および彼の幼少期の逸話の紹介で始め、彼の少年期の修学と、その過程に大きな影響を及ぼしたマ・バ・ジャフのジハードに纏わる情報を提示した後、マ・バ死後のバンバの修学状況へと議論を展開した。そして最後に若年期の彼の著作一覧を提示することで、彼の知的源泉が多地域・多分野の著作によって構築されていた点にも言及した。第2節では、彼の宗教的志向の深化に関して、その契機となったと考えられる出来事を紹介し、特にラト・ジョールを中心とした政治権力者およびその取り巻きであった宗教権威者とバンバとの緊張関係の推移と、その中で形成されていったバンバの思想的な立場を、具体的な複数の出来事の成り行きを追うことで明らかにした。第3節では、まず若年期のバンバが渉猟した著作一覧を提示し、その中に多地域・多教団・多分野の著作が含まれていることに言及した。更に師を求めて複数の教団のシャイフの許を渡り歩いた彼の旅の様子を描写し、最終的に預言者ムハンマドのみが自ら師であるという認識に至ったこと、そして、後のモーリタニア流刑中、預言者ムハンマドを介して神にウィルドを授かったことから、ムリッド教団をカーディリー教団の分派に位置づけることには慎重でなければならないという見解を得た。第4節では、父親の死後、今日のムリッド教団の聖都であるトゥーバの建設に至るまでのバンバの状況を最初に描写し、更に既存の集団の解体とムリッド教団の原型となる新たな集団の成立に言及した。そして、バンバの目指した教育体制に焦点を絞り、それが先達の思想に基づいていたという事実、および1890年代初めに先祖の地ジョロフへと移住したバンバの意図が、トゥーバにおいて崩壊しかかっていたこの教育体制の立て直しにあったという事実を明らかにし、それによってバンバの若年期の移住に関する先行研究の議論の是正を図った。

第2部第2章は、ここまでの議論に登場した宗教知識人達の直接的相関関係を概略図に纏め、教団的枠組みを越えた直接的関係の存在を明示した。しかし同時に、個々の宗教知識人は、直接的関係のみから自らの宗教的・知的形成を図っていたわけではないため、西アフリカの宗教的・知的体系の実像に迫るには、間接的関係の把握が不可欠であることを指摘した。

これを受けて第2部第3章では、バンバを議論の軸として、宗教知識人達の間接的関係を検討した。第1節第1項は、地域外著作（西アフリカ以外の著作）に焦点を絞り、まず西アフリカで伝統的に学ばれてきた地域外著作一覧および若年期のバンバが渉猟した地域外著作一覧を提示した。そしてバンバの著作に影響を及ぼした地域外著者・著作の概説、更にはそれらとバンバの著作との関係性を検討し、彼が多様な地域外著作の内容を自らの著作に反映させていた事実を詳らかにした。続けて第2項では、主に知識の授与と獲得を巡る宗教知識人達の意図に関して、アブー・ハーミド・ムハンマド・アル=ガザリーの著作とバンバの著作との関係を論じ、バンバが彼の周囲に存在した時代的・地域的な問題の対処に地域外の先達の思想を援用していたという具体例を提示した。第2節第1項は、地域内著作（西アフリカの著作）を題材とし、若年期のバンバが渉猟した地域内著作一覧の提示、地域内著者・著作の概説、およびそれらとバンバの著作との関係を考察した上で、バンバの著作を含む地域内著作群の多くが、西アフリカ内外に張り巡らされた間接的な宗教的・知的連関網なしには成立し得なかったことを明らかにした。そして第2項は、まずバンバの思想に大きな影響を及ぼした地域内著者であるムハンマド・アル=ヤダーリーについての概説を行い、更に彼の著作『我が主の祝福』の内容の分析から、サハラ西部のハッサニーヤ詩の性質や、他地域との連関の中で発展した西アフリカの知的活動に言及した。そして、ヤダーリーの著作『タサウフの封印』とバンバの著作『楽園の道』の具体的な内容分析から、両著作の関係性や、ガザリーからアフマド・ザッルーク、ヤダーリー、バンバへと繋がる思想的連鎖などを考察した上で、『楽園の道』の執筆時期も考慮し、ムリッド教団の「労働の教義」と『楽園の道』の内容とを結びつけようとする見解が不正確なものであることを明らかにした。加えて、バンバの著作群に体系的な「労働の教義」が見出されないということにも言及した。しかし、このようなヤダーリーとの関係とは異なり、バンバが先達の思想の「重心」を意図的にずらして自らの思想を構築していたと思われる事例も存在していた。その具体例として、バンバが、スィーディー・アル=ムフタルの著作に見られる預言者・聖者・ウィルド論を、諸聖者および諸ウィルドを等価と見做す議論に応用している事例を提示し、これが複数の教団が並存するスーダン西部の現実的な状況、およびそうした並存を認める思想の存在と軌を一にしている点を指摘した。

最後に今後の課題として、第1に、本論第1部で行ったような西アフリカの宗教知識人に関する情報の整理・蓄積の継続を、第2に、より精緻で、より広範な宗教的・知的連関網の描写を、第3に、他地域との比較研究（宗教的・知的連関網の構造比較、および変容過程の検討を主眼とした思想比較）を提示した。